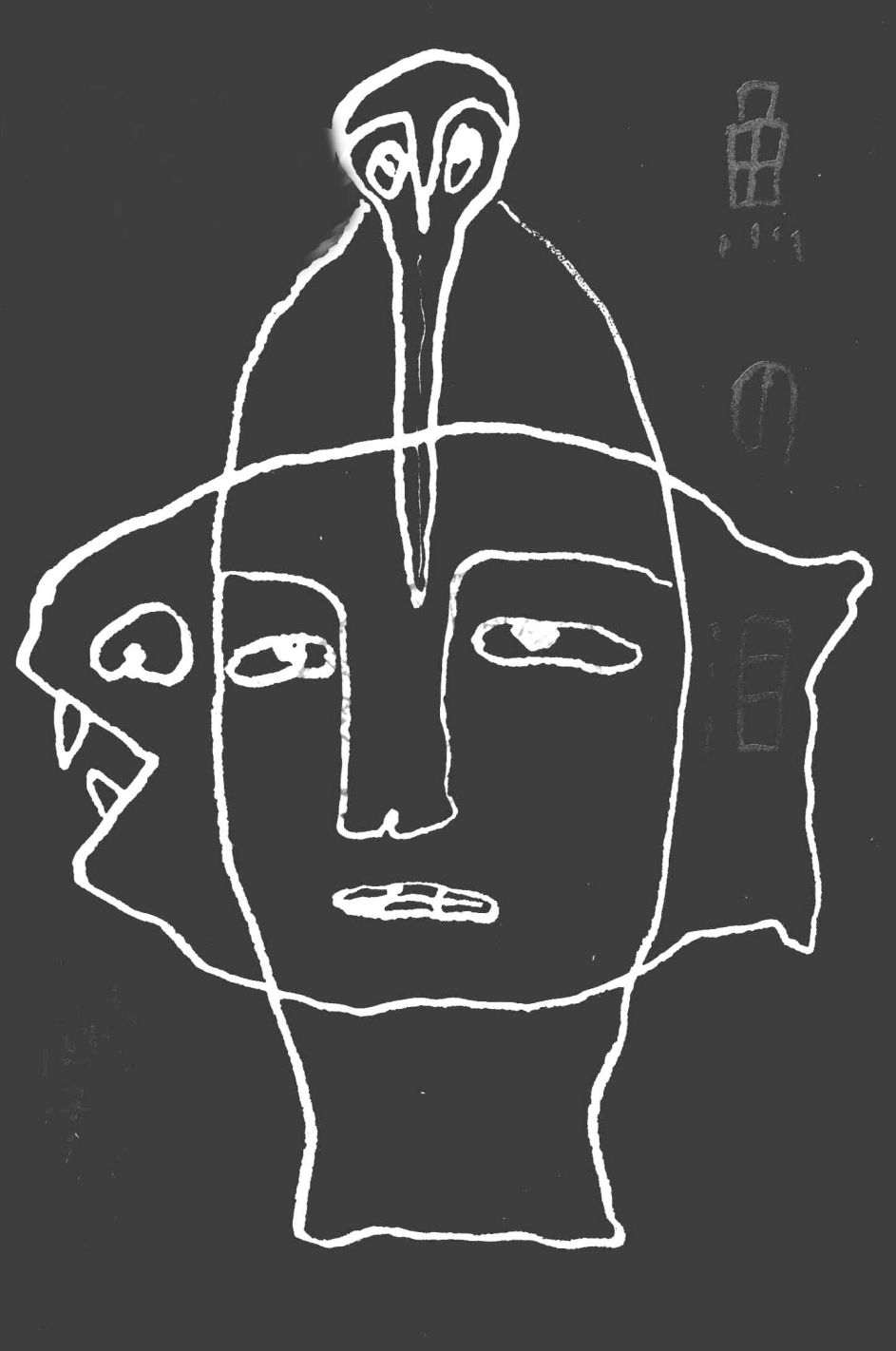

魚の泪

©検印廃止
一九七一

定価　六二〇円

昭和四十六年四月十五日印刷
昭和四十六年四月二十四日発行

著者　大庭みな子

発行者　山越　豊

印刷　三陽社

発行所　中央公論社
東京都中央区京橋二―一
電話（五六一）五九二一
振替東京三四

魚の泪

目次

白樺と氷河の街　7
火草とエスキモーたち　21
森と湖と入江の町・シトカ　41
世捨人たちの蟹獲りの話　55
霧の女　73
屍馬の谷間　85

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.co

サーモン・ダービーの話　107
放浪する者の魂　127
夢に見たパリの現実　149
ロワール河のお城に住んだひとたち　171
パリのアメリカ女　191
魚の泪　213

裝幀　大庭みな子

魚の泪

白樺と氷河の街

Xに

「世界中、学生達が騒いでいて、まったくどうしようもない。とにかく奴らはぶちこわしをすりゃいいんだから」結婚指環をはずしたばかりの跡が、左の薬指の付根に不自然にくっきりくびれついている男は言いました。

わたくしは何年か前、石膏や絵の具ばかりをいじっていた頃から、そういうものが指環と皮膚の間にこびりつく実際的な不便さもあって、また、結婚指環というものがひどく無意味に思えることがあって、指環をはめないことにいたしましたので、不自然にくびれて凹んだその男の左手の薬指をヘンになつかしい気分で眺めていました。

「きたならしくって、どうしようもない。すえた街だ、――ニューデリーは」男は言いました。

「死人がごろごろしている。蛆と蠅と糞の街です」

「では、――そんなふうに、飢えているひと達があふれているのでは、――やはり、騒ぐしか仕方がありませんわねえ」わたくしが言いますと、男は妙に陰気な眼つきでわたくしを眺め、

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.co

肩をすくめました。

飛行機で隣に坐った印度からアメリカに帰る男は、羽田で七時間も遅れた飛行機を待ちくたびれたあげくの無聊も手伝ってか、やたらに喋りかけ、自分は三年ほどある建設の仕事で印度にいた土木技師で、これからオハイオ州のクリーヴランドに帰るところだと自己紹介をしました。わたくしは以前少しいたことのあるアメリカ中西部のことなど思い出して、話を合わせておりました。二ヵ月の日本での滞在の後、日本人のほとんど見当らない飛行機の中で、わたくしは再び異国のひとびとにとり囲まれ、荒野の中にぽいと放り出された野良犬といった自分の姿にやっとゆっくりしておりました。わたくしは木綿のスポーツ・シャツに、一夏はき古したレーヨンのスカート——例のあなたがコーヒーをこぼした、わたくしが東京で年中まとっていたグリーンのスカートです——をかえる間のないままに、伝染病にかかったストッキングに踵のすり減った靴といった、みすぼらしい、若くも美しくもない東洋の女で、歯で噛んでぎざぎざになった爪にやすりをかけておりました。これも、あなたが年中、爪を噛むなと忠告して下さったのを思い出してのことです。

わたくしにとって旅とは、「せめては新しき背広をきて——」というほどの爽やかなうれしさすらどこかに置き忘れた、決して終らない暮しそのもののような感じです。というよりは、

もうこのあたりで、どこかで静かに草のいおりでもむすんで、庭の落葉を掃く暮しをした方がよいのではあるまいか、と思いながらも果たせずにいる、うろつきまわれば何かがあるに違いないといった、諦めの悪いやり方なのです。そして、あるきながら思うことをぶつぶつ呟いて、もしかしたらあなたが聞いてくださるのではないかと、はかない夢をたくしてこれを書いています。どんなふうに暮しているか、とあなたがたずねてくださったので、きままに、思いつくままに、見たり聞いたりしたことをわたくしふうにお喋りさせて下さいますか。

アンカレッジまではたったの六時間半なので、食事のあととろとろと睡ると間もなく、もう飛行機は頭を下げ始め、わたくしはふと日本で買ったトランシーバーのことを思い出し、税関でひっかからなければよいがなあ、と心配になりました。これは夫が年中ボートで海に出るので、遭難したときに沿岸監視船を呼び出すことができるように購入したものなのです。それから、ハンドバッグの中にある三本のわさびの根のことを考えました。これは、わたくしの幼い頃の恩師が、日本を出発直前に山から掘ってきてくださったものなのです。

税関のお役人はトランシーバーをいじりまわし、「いったい、何に使うんだ」とわたくしが国際的女スパイでもあるかのように胡散臭い眼つきで見て、訊問しましたが、「その、つまり、釣に出かけて、ボートのエンジンがこわれて止ってしまったときなどに」としどろもどろ

に言いわけしますと、面倒になったのかそれ以上別に文句もつけず、スーツ・ケースの蓋をしめました。

夫と娘が迎えに来ていて、三人は何となく照れたふうに笑いました。彼はいくらか痩せ、娘はいくらか大人らしくなったように見えました。わたくし達は大してものを言うのでもなく、海の匂いのするさわやかな風が白樺の並木に吹いている街を歩きました。わたくし達がアンカレッジの街でおちあったのは、北極海とベーリング海の町を旅するという、去年の冬以来の娘への約束を果たすためです。五月にわたくしの母が急に死んだので、六月に海の氷がとける頃するはずだったその旅は、二ヵ月延びたのです。もうひとつ、アンカレッジはアラスカ州で一番大きい都会（といっても人口十万）なので、いくらか近視らしく思われる娘の眼を検査して、必要なら眼鏡を買うことと、九月の新学期にそなえて買物をすることでした。

それでまず眼鏡屋に行きました。うす暗い部屋でさまざまな検査をした挙句、娘は大した度ではないので普段はかけなくてもいいが、テレビや映画を観るときはかけた方がいいとのことで、六十五ドルの眼鏡を注文するはめになりました。わたくしは、日本語を教えていたクラスに、貧しいため強度の近視なのに眼鏡が買えなくて、一番前の、真中の席に坐らせるにもかかわらず、黒板の字が見えないため、いい加減にうっすらと見える字の形を真似るので、みみず

の這ったようないろはを書く子がいたことを思い出しました。わたくしはその子一人のために、黒板に書けば済む簡単な文章を、毎日謄写版ですってクラス中の子供達に配っていましたが、その子は他の学科で黒板の字をまったく読めないため、クラス中の子供達に馬鹿にされていました。

「ヴィンスの伯父さんは眼鏡を買ってくれないのさ。おやじもおふくろも眼鏡の金を送ってくれないのさ」残酷な子供達はあからさまに面と向ってそういって、いつもヴィンスを涙ぐませていたのです。ヴィンスの両親は離婚して彼を捨ててしまったので、彼は伯父さんの家に世話になっていました。わたくしはそのことを思い出しながら、そんなに必要ではないかもしれない娘のために、六十五ドルの小切手を切る夫を眺めていました。

それから、わたくし達は娘にコートと水着とブーツを買ってやる約束をしておりましたので、ティーン・エージャーの店を物色しながら歩きました。彼女はいったん思いこんだ嗜好を実現させるためにはパラノイヤ的情熱を示すという、例の思春期的頑固さを持っていて、身につける衣裳、あるいはアクセサリーに対して、ひとたび奇妙な幻想を描くと、それに代わり得る他のどのような品物に対してもかたくなな拒絶反応を示すのです。それで夫とわたくしは、娘の買物につきあうのにすっかり疲れてしまいました。やっと彼女が、らくだ色の衿の大きな、腰

の後にベルトのついた若々しいコートを選び出したときは、夫もわたくしもめまいがするほど疲れ果てていたので、それはわたくしどもの頭で計算していた予算より大分高かったのですが、思いきってそれにきめました。

店を出てさわやかな風の中を歩くと、わたくしは再び生き生きとして、ひどく愉しい気分で道を歩くひとびとを眺めました。ひげや髪を長く伸ばしたひとが多くて、浮浪人的な風俗は中年のひとびとの趣味の中にもかなり強く出ていて、ヒッピイ文化は東京に比べてごく自然にひとびとの生活の中に入りこんでいるように思われました。娘はサンフランシスコとかバークレイなどに興味のある年頃で、どうやら花を摘んで反戦を叫び、野宿をする、といった彼らのやり方にかなり共鳴しているらしく思われます。

「親からお小遣いを貰って、野原でお花を摘んで食べていけるひと達には、誰だってなりたいわよ。パパやママも、おじいさんとおばあさんになって、あんたからお小遣いを貰えるんならヒッピイの仲間入りをしようかなあ」と言うと、娘は苦笑して、「麻薬患者にならないで頂戴ね」と言いました。

娘達の年代の古い制度に対する反抗心と憎しみは、わたくしを途方にくれさせるほど強いものです。彼女に言わせれば、制度化されている機構に協力している者達は、すべて人類の善意

を裏切る者達であり、たたかう意志を言動に示さない限りは誠実な生き方をしているとは言われない、というわけです。彼女は日本語が読めませんので、わたくしの小説など読みませんが、それがいくらか売れたのを知ると、体制に協力したからに違いないと蔑んでいます。また不安定なわたくしの収入などとは、質量共に較べものにならない安定したサラリーをとっている父親を蔑み、そのお金でコートや眼鏡やブーツを買わせています。実際、こういう娘ときちんとした話をすることはかなり難しく、唯一の合鍵はものごとをあるがままに見て、感情をぶつけ合うことなのです。わたくしが何年か教師として子供を教えていて学んだことは、子供というものは大人から対等な人間として扱われない限り、大人を信用しないということです。騒いでいる子供をしずめるために怒鳴っても、そんなことはほんの一時的にしか役に立ちません。教師は咽喉がかれて、疲れてしまうだけのようです。だからわたくしは娘と本気になって言い合い、涙を流して和解できたらと思っています。

アンカレッジの町には日本人が驚くほど沢山います。ホテルの食堂は二割近く日本人で占められていましたし、町のドラグ・ストアーでハンバーガーを食べていれば、隣には日本人の女子学生がアメリカ人の学生とデイトしていました。日本人の旅行客には、アメリカ中どこへ行っても会わないことはないくらいですが、ことにアラスカ州には近年いちじるしく、漁業、木

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.co